

## 武蔵野日曜聖書講筵 復活節

## 復活のキリスト

——ルカ伝第23章39～43節、24章1～12節——

1991年3月31日

小池辰雄

我は火を地に投ぜんとて来れり 今日なんじは我と偕にパラダイス ジガバチ 気がつけばいい その奥に本当のものが動いている 本ものをつくる 彼は此処に在さず 第三の旅人 霊の体あり 「僕の伝道はまちがっていたよ」 福音書は行動能力をそなえた生きもの キリストに化せられていく

## 【ルカ23】

39 十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』40 他の者これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。41 我らは為しし事の報を受くるなれば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』42 また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

## 【ルカ24】

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転まろばし除のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりしに、視よ、輝ける衣きを著きたる二人の者ひとの傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏ふせられたれば、その二人の者ひという『なんぞ死しにし者ものどもの中に生なける者ものを尋たずぬるか。6 彼は此こ処こに在いまさず、甦よみがえり給たまえり。尚なほガリラヤに居い給たまえるとき、如何いかに語かたり給たまいしかを憶おもい出いでよ。7 即すなはち「人の子は必ず罪ある人の手に付つされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまえり』8 ここに彼らその御言みことばを憶おもい出いで、9 墓より歸かへりて、凡すべて此等これらのことを十一弟子および凡すべて他の弟子たちに告つぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告つげたり。11 使徒たちは其の言ことばを妄語たわごとと思おもいて信まぜず。12 「ペテロは起たちて墓はらに走りゆき、屈かみて布ぬのみあるを見、ありし事を怪あしみつつ歸かへれり」



●我は火を地に投ぜんとて来れり

ルカ伝12章49節、50節は、私は第十卷（『聖書は大ドラマである』）に選ばなかったのは残念だったと今思っておりますけれども、非常に大事なところですよ。

「49我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」（ルカ12・49～50）

この訳は名訳ですね。「火を投ぜんために来れり」と。もちろん、聖霊の火のことです。

「この聖霊の火が燃えたら、もう何も望むことはない。これだけが私が一番望んでいることなんだ。

あるいは唯一の望んでいることなんだと。非常に強い言葉です。

けれども、その前に受くべきバプテスマがある。

キリストのバプテスマは十字架です。

「十字架というバプテスマを受けなければ、この火を投ずるわけにいかない」ということなんです。非常にはつきりしている。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや」

と。復活節を迎えるにあたって、十字架のことに触れなければならない。それで、さつきルカ伝23章のところを読んでいただいたわけですよ。

福音書の中でルカ伝が一番聖霊のことに触れていることに気がついた。むしろ、聖霊のことはヨハネ伝よりか、ルカ伝の方が多い。

●今日なんじは我と偕にパラダイス

ルカ伝23章39～49節。申し上げているとおり、人類を二つに分ける、その型がこの十字架の両方にあるわけだ。片一方は傲慢な霊。片一方はくずおれる霊、ひれ伏す霊。傲慢な霊はサタンの手下、地獄ゆきだ。平伏す魂は天国へ。それがはつきりここで表れているのだから、ルカ伝のこここのところは素晴らしい。他の福音書にはない。

片一方の盗賊は、

「我々は散々悪い事をしたんだから、十字架に懸けられたって仕方がない。まんな中の方はひとつも悪いことはしないのに、お前はそんな不遜なことを言うか」

と、もう片一方の悪者に向かつてはつきり言った。そして

「イエスよ、御国に入り給うとき、せめても覚えてください」

と、キリストの前に平伏した。だから、キリストが無条件に、

「われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイス」

と。このギリシヤ語よりもむしろヘブライ語の方がもつとはつきりしている。「あるべし」



より、

「パラダイスだぞ」

と言った方がいくらいです。もともとキリストの言葉はアラミ語ですから。

最初にパラダイスにキリストと一緒に入ったのは、散々悪いことをして人生マイナス99を送った奴だ。最後の1点で、このプラス1がマイナス99をやっつけてしまった。我々は毎日キリストの前に平伏してないと。また、平伏さざるを得ない。「ねばならない」という世界はダメですよ、「ざるを得ない」世界でない。「ねばならない」「こうしなければならぬ」というのは律法的世界。同じ字なんだけれども、ギリシヤ語の「デイ」という字は「ざるを得ない」

と訳さなければ。平伏さざるを得ない。キリストの愛は我々を圧倒していらっしやる。

私たちは、どんな現実でもパラダイスなんです。

「キリストと偕ともに」

「キリストわがうちに」

という、み霊のあるところはパラダイスです。あなた方一人ひとりが天国の源泉です。詩篇23篇を身体で証しながら歩いている。運命環境はどうでもいいよ。どんなに絶望的でもいい。人に何と言われてもいい。

もう本当に、聖霊くらい有難いものはないね。「聖霊」というと聖きよき霊だから、

「私はなかなか聖くならない」

なんて思ったら、冗談じゃないよ、泥だらけでいいんです。泥だらけの中に金剛石が光る。だから、

「我を清めて」

とかいう、あの「清めよ」というのは、私は嫌いなんだ。清まるかというんだ。ゴミみたいなものだ。ところが、

「このゴミの中に三千のお経がある」

と、禅宗の方ではそんなことを言っている。

## ●ジガバチ

薩摩琵琶の本の中に、

「蠅じがばち蜂はち」

というのが出てくる。「ジガバチ」という蜂がいる。この蜂が幼虫を育てて鳴く時に

「ジガジガ」

と鳴くんだそうだ。それで「ジガバチ」という。「ジガ」とは「似我」なんです。

「我わがに似によ、我わがの如ごとくあれ」

と。この蜂は他の蜂を中に導き入れて、「ジガジガ」と鳴いているうちに、他の虫がこの蜂



みたく成つてくるという。他の虫を自分の実存に変えてしまう、変化させてしまう。キリストは私たちを聖霊をもつて、

「我の如くあれ」

という。パウロが

「我の如く、我に従え」

とか、どつかでそんなことを言つてたね。「似我」、「我に似よ」と、キリストがそう言つて  
いる。似るばかりでなくて、最後は一如の世界になる。

「蠚蛾じがという虫は如何なれば、

己が姿に無き虫を、

自分の姿でない虫を、

それを我が巢に集めつつ、

自分の巢の中に入れていく。

心尽くして祈りせば、

「祈りせば」というのは、ブンブン鳴いていること。

我に似ることあるぞかし。

我ら如き迷いの深き身も、

かほどに深く祈りなば、

などか徴の無かるらん。

必ずそういつた徴が表れてくると。

唯身の浄土、

これは素晴らしい言葉だね。この身だけが浄土という。

己心の弥陀と聞くときは、

己が心が弥陀、阿弥陀仏になる。

十万億土の極楽も、

ここを去ること遠からず。

すぐそこだと。

みな人はこの理ことわりを知らずして、

罪はかなを作ること憊はかなけれ。」

と、面白いことが書いてある。

キリストは蜂じゃないけれども、このようにして「我に似よ」という。だけれども、「我に似よ」という言葉がヘタすると——

『イミタチオ・クリステイ（キリストに倣なまいて）』

という有名な本がありますが、あれは「倣なまいて」というよりかむしろキリストに「即して」  
です——マネしたつてダメなんだ、本当は。即して動かなければいけない。「キリストに在る」



「そこに在る」ということです。

「汝ら我に居れば、我れ汝らに居る」

という、ヨハネ伝の15章。あの「居る」というのは「宿る」という字です。この字は「うかんむり」に「人」に「百」と書く。うかんむりは「屋根」、「百」は寝台だそうだ。家の中で人が寝台に寝る、だから、「宿る」ことになるそうだ。おもしろいね、漢字というのは。お宿になる。宿る。だから、中に入らなければどうにもならん、外側では。

### ●気がつけばいい

それで、キリストと一緒にパラダイスに入ってしまう。私たちはなにも頑張る必要はない。キリストの中に自分を投げ入れていけばいい。投げ入れられなければ、そこにぶつ倒れればいい。そうしたら、キリストの腕の中だったと、こういうはなしです。十字架で既に贖われているんです。

「行きますから、贖ってください」

じゃない。

「お前は、既に贖ったから、やって来い」

と、イザヤ書にも書いてある。

「救いは完了しているぞ。だから、心配ない。その事にただ気がつけ」

ということ。気がつけばいいんだ。こんな易行道いぎようはないじゃないですか、気がつけばいいんだから。

「はあ、もう救われていたんですか。有り難うございます」

と。「有り難うございます」の他何もない。全存在がただ「ありがとうございます」なんだ。

あなた方、本当にそういう境地に入ってくださいよ。

「私はまだ」

なんて、「私」なんてものは問題じゃないんだから。「私」を問題にしていたら、いつまでたつても始まらない。

ルッターが発見した

「テオロギアゲルマニカ」(ゲルマニアの神学)

という本がある。そこに、

「我、我、我と言ふな。汝、汝、汝と言え。あなたただけだ」

と書いてある。

「あなたの他には我もなく、世もなく、ただ汝のみいませり」

という讚美歌(529番「ああうれしわがみも」)もあるじゃないですか。その中に入ってしまった、「隠れ蓑」みのだ。どこにいるかと思つたら、その中にいたというだけのはなしだ。

だから、私は「信仰」の「仰」の字は嫌いなんだ、仰ぐというのは。交わる「信交」と



いう世界に入らなくては。その中に入る。これは非常に簡単なんです。

そういうことは、無教会の先生方は言わなかったよ。聖霊の本当の世界が無教会では、無かった。「について」は語ってます。「について」は書かれています。「について」はダメです、「に關して」は。

「中から告白せざるを得ない」

という世界に入るまでは本ものでない。

いいね。簡単ですよ。もう即、今日この集会そのもので、どなたも例外なしに、キリストの中に入ってしまふ。その中に入ったら、もう聖霊の世界だから。

「キリストの六尺の人の中に何人か入れますか」

なんて何を言っているか。そんなことではないんだ、霊の世界は。自然科学的な判断では分かりませんよ、この霊の世界の素晴らしさというのは。

●その奥に本当のものが動いている

ルカ伝12章49～51節の、

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を  
 可望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまで

は思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～51)

キリストは、

「みんなに与えたいのはこの火だけなんだ。しかも、その前に私は受くべきバプテ

スマ、十字架がある。お前たちの過去・現在・未来の自我という我執の罪は、全部、

私が十字架でもつて引き受けてしまった。何を自分のことを考えているか」

と言う。相対的人間小池は死に到るまで罪びとでいいです、そんなものは考えていない。けれども、その奥に本当のものが動いている。これは誰が何と言おうとも否定できないものが来ている。だから、私は集会をしているんですよ。私は、人間的に立派でなければ話してはいけないならば、今日にでも止めるよ。ちつとも立派な男じゃないから。

パウロが、

「我は罪びとの首だ」

と言ったが、最大の弟子になった。内村鑑三が、

「私も罪びとの首で、だから万人は救われるんだ」

と。その内村鑑三は、明治・大正・昭和にかけての日本の精神界の第一人者です。人間小池は何だか知らない。けれども、これも大きな使命を持っている。

私の兄貴(小池政美)の死は大犠牲だった。上役の人が

「小池君の死は日本の損失だ」



と言った。だから、私は兄貴の弔い合戦をしないではいられないわけだ。母は失明してしまったし。私は、母の写真はいつも胸のポケットに入っている。犠牲によつて私は救われた男ですからね。

それでもう、キリストの十字架でもつてすつ飛んじやつているから、だから本当に楽でしょうがない。「頑張る」必要は一つもない。よく

「頑張れ、頑張れ」

と言うが、がんばつたらくたびれるよ…(異言)…。上から力が来るんです！ 圧倒されているんです。キリストが、私を、あなた方一人びとりを完全に贖い去っているから。キリストに許されて、人を許すことのできないことはない。そういう人はパリサイで、地獄に行く。

「人新たにされる」

というのは、そのことなんです。我々は根源的に新たにされている。ということは、十字架で。

「新たにされているから、古いものはないか」

と、そうじゃない。矛盾構造になつてきているよ。そんなことを気にするなということですよ。そんなことを気にしているから、いつまでたつても始まらない。烈々たるものが動かない。いいですね。あなた方、自分の顔が見えるかい。見えないだろ。その通り、「我」というものは見えないんです。見えなくなるのが、本当なんです。鏡で見るんじゃないよ。

### ●本ものをつくる

あなた方、伝道は——人数はいいですよ——本ものを一人でも二人でも本当につくってください。「つくる」と言つたつて、自分がつくるんじゃないけれども。ペンテコステであれだけ三千人も救われて、結局残つたのはペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけでしょ。あと、マルコというのがあるけれども。まあ、四、五人だ。キリストの本当の弟子は四、五人しかない。それが新約聖書だ。もちろん、ルカやマタイはそれの筆先になつたけれども。十人足らずだ。そんなもんですよ。

ただし、本ものは歴史を動かす。カーライルの

『英雄崇拜論』(ヒアローオアシップ)

という本がある。カーライルのあの本は素晴らしい。ダンテも出ている。本当の「個」は、人が何と言おうが、これが歴史を動かす。

ナポレオンがセントヘレナに流されて、最後に福音書を読んだら、

「これは本じゃなかった、生き物だった。もの凄い力を持ったものだ。この愛にはとてもかなわない。我々の自我すらもこの愛にはかなわん。自我をやっつけるのはキリストの他にいない。キリストと私のみじめさとは何と大きな差だろう」



と、最後に心砕けたから、ナポレオンは天界に行つたね。あんなヒットラーだの、フセインなんて野郎とは大違いだ。ダントに言わせると、マホメットも地獄に入っている。皆さん、男の人も女の人も烈々たる魂であつてください。烈々たることと、廣大無辺ということとは決して矛盾しない。誰にも私は認められなくていいんだ。そのかわり、一つの詩を書いてサヨナラするから。この詩に全部盛る。「誰にも」と言つたつて、あなた方は非常に大事な兄弟姉妹です。

### ●彼は此処に在さず

「十字架・聖霊」の、ルカ伝12章の49節、50節は新約聖書の中で一番大事な言葉のひとつです。それから、少し先へ行きましようね。24章1節から12節、

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備まもえたる香料を携もえて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転まろばし除のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりに、視よ、輝ける衣きを著きたる二人の人その傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏ふせられたれば、その二人の者ものいう『なんぞ死しにし者ものの中に生なける者を尋たずぬるか。6 彼は此こ処こに在いまさず、甦よみがえり給たまへり。尚なほガリラヤに居ゐ給たまへるとき、如何いかに語り給たまひしかを憶おもひ出いでよ。7 即すなはち「人の子は必ず罪ある人の手に付つき、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまへり』。8 ここに彼らその御言ごごんを憶おもひ出いで、9 墓より歸かへりて、凡すべて此等このごとのことを十一弟子および凡すべて他の弟子たちに告つぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告つげたり。11 使徒たちは其の言ことばを妄語たわごとと思おもひて信まぜず。12 「ペテロは起たちて墓かに走りゆき、屈かがみて布のみあるを見、ありし事を怪あやしみつつ歸かへれり」

マグダラのマリヤをはじめ女の人たちが使徒たちに言つたけれども、ペテロなんかは、それを受けとらないわけだ。「ありし事を怪あやしみつつ歸かへれり」なんて、まだ怪あやしみつつ、「変まだなあ」なんて。キリストの、すでに予言もあるのにはです。だから、十字架の贖あがないをするまではダメなんです、どんなにペテロであろうと、ヨハネであろうと。はつきりしているんだ。

### ●第三の旅人

「13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオといふ村に往ゆきつつ、14 凡すべて有ありし事ことどもを互たがひに語りあふ。15 語りかつ論ぼんじあう程ほどに、イエス自ら近づかりて共に往ゆき給たまへり。16 されど彼らの目まを遮さえられて、イエスたるを認まむること能あたわらず。17 イエス彼らに言い給たまへり『なんじら歩あみつつ互



に語りあう言は何ぞや』……<sup>25</sup>イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。<sup>26</sup>キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』<sup>27</sup>かくてモーセ及び凡ての預言者を始め、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。(ルカ24・13  
…27)

有名なエマオ途上の話です。二人の弟子がいろいろ話しているうちに、第三の旅人がそこにやってきて、

「ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ」と言われてしまった。

「キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入ること知らないのか」と。語っているのがキリストだということを知らないわけだ。これはもう、聖書のとおりなんです、こういう現実はね。

「<sup>28</sup>遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、<sup>29</sup>強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。<sup>30</sup>共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、<sup>31</sup>彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。」(ルカ24・28～31)

パンを取って裂いたら、イエスがなさった前の姿がパツときた。

「あつ、これはキリストだ」

と思って目が覚めたら、もうキリストは今度は姿を消してしまった。四十日間、あちらこちらにキリストは現れた。最後の十日間はよく祈れというわけだな。

### ● 霊の体あり

それで、戸が閉じてあるのに、入って来た。

「<sup>36</sup>此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と言い』給う。<sup>37</sup>かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、<sup>38</sup>イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』<sup>40</sup>〔斯く言いて手と足を示し給う〕<sup>41</sup>かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』<sup>42</sup>かれら炙りたる魚一片を捧げれば、<sup>43</sup>之を取り、その前にて食し給えり。」(ルカ24・36～43)

これを、大体、神学者も牧師さんも宗教物語くらいに思う人が多いんだよな。それじゃダメだ。これはその通りなんだ。パウロがコリント前書15章で、



「血気の体あり、霊の体あり」

と言ったでしょ。この「霊の体」なんです、これは。霊の体、からだなんですから。私の兄貴が死ぬ前に、繁忙の中で訳したのが、ゴーデイの

『キリストの復活』

という本です。これは名著です。これにもコリント前書15章が非常によく書いてある。これは藤井先生が出してくださったが、別にそんなに売れなかった。

だから、びっくりしたんだ。

「手と足を示し給う。かれら歡喜の余に信ぜずして怪しんだ」

と。飲んでいられるけれども、まだ信じない。怪しんでいた。その通り書いてある。キリストは、

「食べ物があるか」

と。魚が一切れあった。それを取って、

「その前にて食し給えり」

と書いてある。キリストは食べてしまった。

「44また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』」

キリストは、

「旧約の預言は全部、私は成就した。それ以上の世界だぞ」

というんだ。

45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、<sup>46</sup>『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、<sup>47</sup>且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの<sup>くにびとのべつた</sup>国人に宣伝えらるべしと。』

「悔改」は回帰、立ち戻りということですよ。

<sup>48</sup>汝らは此等のことの証人なり。

「汝らは此等のことの証人なり」と。まだ本当の証人になれないんだ、まだ聖霊が来てないから。

<sup>49</sup>視よ、我は父の約し給えるものを、

即ち聖霊を、

汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』(ルカ24・44)

「汝らは上より能力を著せらるるまでは都に留って祈っている」というわけだ。ちゃんと先の先まで、キリストは見えておられる。

「私の十字架の贖いをした後に来るところの聖霊を受けたら、ガラリ変わるぞ」



と。福音書のペテロは沈んだり躓いたり、いろいろやって、キリストを呑んだりした。ところが、使徒行伝のペテロは俄然変わってしまった。

●「僕の伝道はまちがっていたよ」

藤井先生といえども、使徒行伝はあまり好きじゃなかった。ただ行為の世界かと思つたら、そうじゃない。聖霊の働きの世界だ。だから、これが無教会の限界だ。塚本虎二先生が最後に私に、

「僕の伝道はまちがっていたよ。手島君と君のは本当だから、しっかりやってくれ」

とはつきり言った。これは聖霊の世界だから。そんなことは録音してないよ。録音してないけれども、私ははつきり聞いたから覚えている。塚本先生の遺言みたいだった。塚本先生は私の聖霊の働きをその前に非難した。先生は、本当は負けてしまった。

十二召団の一角が欠けた。ある人が、

「その人はちゃんと先生に挨拶しましたか？」

と聞いた。いいんですよ、そんなことは。挨拶しようがしまいが、私は何とも思っていない。もう、本当に突き抜けてしまうと、相対的なことを問題にするのはバカらしくてしようがない。どうだつていいんだよ。ただ、その人たちが本ものになってくれればいい。それだけだ、願っているのは。今日は、あなた方一人びとりに何らかの意味において、新しい世界が開示していると私は信じています。

私の詩はダンテやゲーテにはかきません、詩としては。けれども、内容的には、彼らの書かないものを書いてみせる。とにかく、この驚くべき福音を証しせざるを得ない。孔子が、

「千万人といえども我往かん」

と言つたが、その通り。皆さんも、それだけ一人は、一人びとりは、もの凄いんですよ。もう単なる知識の世界じゃないですから。超論理、超知識。全部、超えている世界です。

だから、聖書は凄いんですよ。そういう次元でものが書かれているから。人間的な間違いがあつたつていいよ、そんなことは。旧約の世界なんか、まだ未然の世界がたくさんある。けれども、とにかく新約は聖霊の充満しているところですからね。新約聖書なんかは、しょっちゅうポケットやハンドバックに入れて、電車の中でもどこでも読んでください。楽しいから。ドラマだから。教えじゃないから。教えだなんて思うからダメなんだ。

「それでは、こうしなければならぬ」  
とか。「ならない」じゃないですよ。

どうですか、みんな、楽しいんでしょうね。なんか、シーンとしているけれども（笑）。私一人で楽しがつている。（「そんなことありませんよ」の声あり）。

そうだ、そうだ、楽しいね（笑）。そういうことだね。もう、問題なんかあつたつていいんですよ。



そんなものは全部乗り越えてしまおう。分析して考えるな。いろんな事につくわせばつくわすほど、逆に凄くなる。逆に、反比例するんです。

### ●福音書は行動能力をそなえた生きもの

さつき、私はナポレオンのことを言ったけれども、著作集の『百世の師ヒルティー』（第五巻）の190頁に書いてある。ヒルティーが『病める魂』という所に載せている。

「そしてヒルティーは、『不可能という言葉は私にはない』と言い放つことの実際できた蓋世の英雄ナポレオンが、孤島セント・ヘレナでその生涯の終末にあたって聖書を繙き、しみじみと述懐した言葉を掲げているが、その全文をここに紹介せざるを得ない。

「福音書には不思議な力がある。言つにいわれぬ作用がある。心を魅すると同時に理性にも訴える或る温かさがある。福音書の内容にふかく思いをひそめると、まるで天空でもながめているときのような気持になる。福音書は書物ではない、行動能力をそなえた生きものである。そしてその普及に反対するすべてのものを引きさらってゆく力さえ持っている。この書は特にこの私の机の上におかれてある。私はくりかえしこれを読んで倦まない。毎日、私はおなじ喜びをもってこれを読んでいる。

キリストは語る。かくしてもろもろの世代は、血のきずなよりもさらに緊密な、さらに深く、心こまやかな絆によって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たせる。これによって、何よりも強力な利己、自愛は打ち滅ぼされる。我々は彼の意志のこうした奇蹟から、この世の創造的な言葉を読みとらずにはいられない。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなくこうした愛の国である。あらゆる時間的な限定を打ち破って人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊の絆を創ることができたのは、ひとりキリストのみである。なぜなら、率直にキリストを信する者は、すべて、こうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間悟性をもってしてはいかんともしがたい現象であるこうした不思議な愛を感じるからである。それは、この新しいプロメテウス（キリストのこと）によって地上にもたらされた聖なる火（聖霊のこと）であって、偉大な破壊者である〈時〉でさえも、それを消すことはできないのである。……全世界で愛され、畏敬され、伝道されているこのキリストの永遠に活ける国と、この私のひどいみじめさは、本当になんというちがいであろうか。」「

ナポレオンがこういうように告白している。さすがにナポレオンだね。彼はセント・ヘレナに流された後で、天界へ行ったに相違ない。文化的にも非常に優れた人です。

### ●キリストに化せられていく

今日は、コリント前書15章は引用しませんが、キリストのこんな、魚まで食べた



ところの事態は全く霊体です。その霊体は自在に、また見えなくなる。これはとても大変な現実です。もう平伏して降参するよりかしようがない。降参したら、知らないけれども、段々そのようになっていく。修養でもだんだん悟り澄ますのでも何でもありません。とにかく、キリストに圧倒されながら進んでいくだけのはなしです。だから、私は

「主さまー」

と一言、全存在で祈り込むと、直ちにその世界に入れられる。簡単なんです。だから、力が来てしようがない。ありがたくて。この世の運命環境、自己には絶望してくださいよ。そんなところに望みなんかありません。本当の望みは上からやってくる。そして、キリストに化せられていく。

「ついにイエス・キリストの姿に化するなり」

とパウロは言っているではないですか。いやとにかく、パウロは凄いな、パウロの告白は。パウロの手紙を見ても、こんな手紙があるかというんだ。圧倒されているんだ、パウロは。だから百難を突破できた。やつぱり、パウロというのは選びの器だよな。

その過ちの最大なパリサイであったパウロが、その同じ過ちをしていた同胞に対して、

「私がこんなひっくり返されたんだから、お前たちも変われ。お前たちが変わる為には私はキリストに棄てられてもいいんだ」

と言っているでしょうが。ところが、イスラエルはさつぱり変わらない、ユダヤ人は。少しは変わったらしいのに。ある大きな団体がしょっちゅうイスラエルに行つてらっしゃいますが、あれは変えるつもりで行つてるのか何だか知らんけれども。

「あなた方はキリストをどうしたんですか!？」

とでも言っているのかな。

もう、私は異言が出そうで、困るんだ、本当は。言葉にならんです。楽しいじゃないですか。アーメンのほか何もありませんよ、あなた方。

「でも……」

なんて言つて、何か質問しても、質問は受けないから。「でも」なんて、ありつこないんだ。無条件の世界です。それだけの聖霊の現実は、内村鑑三、藤井武、塚本虎二から私は聞きませんでした。先生方は素晴らしい先生方です。それぞれの役割はちゃんと果たした。けれども、使徒たちの次元からはズレた。

いいですか。皆さんは、キリスト召団はものすごい使命を帯びた存在ですから、各召団は本当にそのようにして証してください。それでは、これで終わります。

